勝手にGA５『有名店の型くずれクッキー』

飛剣祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勝手にＧＡ５『有名店の型くずれクッキー』

【Ｎコード】
Ｎ３６０５Ｎ

【作者名】
飛剣祐

【あらすじ】
ふとしたことから旧知の義姉妹と再会したフォルテ。義妹につらくあたるかつての同輩をたしなめるフォルテだったが、その裏には・・・

『フォルテさ～ん、起きてます？』
フォルテの部屋に通信のモニターが開き、見慣れた蘭花の顔を映しだす。
だるそうに目を覚ます二日酔いのフォルテ。
「・・・んだよ、ランファか・・・アタシは今日一日寝るって決めてんだ、起こすな・・・」
『そういうわけにいきませんよ。ウォルコット中佐から起こしてくれって頼まれてんですから。この前の出張のレポート、どうなってるかって』
「・・・この前の・・・？」
そのとたん、がば、とベッドからはね起きるフォルテ。
「おい今日何日だ？！」
大声でつぶやきながら、カレンダーに目をやる。
「・・・今日までじゃねえか・・・」
昨晩の酔いどこへやら吹き飛び、冷や汗をしたたらせる。
「・・・やばい・・・な・・・どうすんべか・・・」
『あの、フォルテさん？』
「・・・中佐、今日いきなりポックリ逝かねーかな・・・？」
蘭花の声をよそに、何の解決にもならないことを考えるフォルテ。
『えと・・・フォルテさん？』
様子のおかしいフォルテをいぶかしむ蘭花。
「お――っと！！大事な用を思い出したぜ――！！　ご先祖の墓参り――！！」
唐突に大声をあげ、部屋から飛び出していくフォルテ。
『あ、ちょっとフォルテさん！！　・・・逃げたわね』

エンジェルルームで、エンジェル隊の皆がいつも通りにくつろいでいると.
かなり焦った様子のウォルコット中佐があわてて飛び込んできた。
「ああ皆さん！フォルテさんがどこへ行かれたかご存知ありませんか？」
「え？今日はまだ見てませんけど・・・」
「あ、フォルテさんならさっき出てっちゃいましたよ？　紋章機で」
ちょうど入ってきた蘭花が答える。
「なんですとお――！？」
叫び声をあげる中佐の形相に、部屋の皆が思わず驚いて後ずさりをする。
「そんな困りますよ、あのレポートの提出期限は今日までなんですよ！？　私が怒られちゃいます！！」
「そんなこと言われても・・・」
「あ、そうです。」
いきなりぽんと手を打つ中佐。
「ここはひとつ、皆さんのどなたかが誰か代わりに書いてくださるというのは・？」
あまりになげやりな中佐の発言に、その場の全員があっけにとられる。
『イキナリ何ヲ言イダスンダロウネ、コノオッサンハ』
「フォルテさんの出張の内容なんて、わたくし達にわかるはずありませんわ・・・。」
『マア、アノ人ノコトダカラドウセ、サボッテぱちんこ三昧ニアケクレテイタトカ、ドウセソンナトコデショウ』
「そこをなんとか。こうなったらもう、話のつじつまさえ合っていれば何でもいいですから！」
「そんないいかげんな・・・」

「でしたら、中佐がご自分でお書きになれば・・・」
そのとき、今まで黙っていたヴァニラがふいに前に進み出、挙手をする。
「え？　ヴァニラさん？」
「おおヴァニラさん！　やってくれますか？！」
こくり、とうなずくヴァニラ。

「・・・さて、飛び出してきたはいいが・・・」
手近な惑星で、とりあえず街をぶらつくフォルテ。
いつの間に着替えたのやら、服装はいつものコート姿になっていた。
「どこで時間つぶしゃいいんだ・・・？金はこないだのパチスロで使い果たしちまったしなあ・・・」
フォルテがそんなことを考えながら歩いていると。
「・・・フォルテさん？フォルテさんじゃないですか？」
突然、名前を呼ばれて振り返るフォルテ。
「お前は・・・」
そこには、歳は１５、６くらいだろうか、水色の髪を後ろに束ねた、やや切れ長のひとみの少女がそっと微笑んでいた。
古い記憶から、その顔を探しあてるフォルテ。
「・・・ルベリィ？おまえルベリィかっ！？」
「お久しぶりです、フォルテさん。」
そのとき、フォルテの腹が無粋な音を立てた。
「・・・くすっ。良かったらお食事どうですか？私の働いてるお店、この近くですから。」

街の片隅にある、小さな軽食の店。

「悪ィな、奢ってもらっちまって。久しぶりに会ったってのに。」
「いいんですよ。あ、また昆布残そうとしてる。だめですよ、栄養あるんだから。」
「――っと。・・・ったく変わってねえな、そういうとこは。・・・ま、お前には戦場よりこっちの方がずっと合ってるよ。」
「ところでフォルテさん、今日はどうしてこちらに？」
「まあ・・・その・・・何だ。それより元気か？親父さんは。」
言葉を濁しながら、話題をすりかえるフォルテ。
「亡くなりました・・・去年の夏に・・・」
少し、表情がうつむき加減になるルベリィ。
「・・・悪いこと聞いちまったかな・・・」
ふと何かに思い当たったフォルテが、おもむろに立ち上がり。
「ああマスター。ツケですまねえが・・・酒のいいとこみつくろってくんねえか？」
ルベリィに軽く笑いかけると。
「やれやれ・・・本当に『墓参り』することになっちまうとは、な。」

墓前に、先客がいた。
フォルテと同い年くらいだろうか、トランスバールの軍服を着た、藍色の髪の長い女性。
「あ・・・」
フォルテもルベリィも、良く知っている顔だった。
ふと、2人の気配に気付いた彼女がふり返り、驚きの表情を浮かべる。
「フォルテ・・・フォルテ・シュトーレン・・・？」
「クランベル・ジャーム・・・？」
「ねえ・・・さん？」

そう呼んだルベリィを、「クランベル」と呼ばれた女性士官がきつい目線でにらみつける。
「何度言わせれば気が済むの？　あなたに姉と呼ばれる覚えはないわよ！！」
その刺すような言葉に、身じろぎもせず、まっすぐ「義姉」から視線をそらさないルベリィ。
「でも義姉さん！」
「おだまりなさい！」
「おいクランベル！」
見るに見かねたフォルテが口をはさむ。
「フォルテ！　他人が口をはさまないで！！」
「・・・はさみたかねえけどな。いいかげんこだわるのは」
「あなたに何がわかるの？！」
いまいましげな目つきでルベリィを一瞥すると、クランベルははき捨てるように
「家を潰したあげくに、こんな廃棄処分のポンコツ人形を拾ってきて・・・これが妹の代わりになるとでも思ってるの！？」
「代わりにはなれません。でも私は」
「これ以上、あなた達と話す事はなにもないわ」
「義妹」とかつての同輩に背を向け、立ち去ろうとするクランベル。

不意に、フォルテの通信機に呼び出しが入った。
『――フォルテさん？』
ミルフィーユの声が届く。
「うわ！　ア、アタシはここにはいないぞー！？」
『・・・何言ってるんですか？　レポートだったら、ヴァニラさんがやってくれるそうですからだいじょうぶですよ。』
「・・・ヴァニラが？」

怪訝な顔をするフォルテ。
『だからフォルテさん、もう戻ってきても・・・』
『待ってくださいまし』
いきなりミントが横槍を入れる。
『フォルテさん。その座標・・・惑星Ｄ－チアゲルですわね？
でしたらついでに、調べて欲しいところがありますの。』
「・・・あ？」
『ここ最近、ロストテクノロジーの強奪事件が相次いでいるのはご存知ですわね？どうやら、犯人のアジトはその星にあるらしいのですわ』
「なんだってこの星に・・・！　ってミント。ちょっと都合良すぎねえか？」
疑わしげなまなざしのフォルテ。
『ぎく・・・な、何をおっしゃりますの？　偶然ですわよ、偶然。』
表情は見えなかったが、あわてた様子でミントは勝手に通信を切った。
「おいミント！　・・・ったくしょうがねえな・・・」
「今日来られたのって、その任務じゃないんですか？」
屈託の無い表情で訊ねるルベリィ。
「え？　あそうそう、実はそうなんだよこの任務なんだよー。あはは。」
すでに見透かされている気はしながらも、フォルテはごまかすような笑いを浮かべた。

その陰で。
それとなく話が聞こえていた、クランベルの表情がこわばる。
ほんの数秒ほどの躊躇のあとに、こっそり取り出した通信機に声をひそめ、何者かに向かって命じた。

「・・・あの、片眼鏡の女を・・・始末なさい！！」

エンジェルルーム。
『・・・ウマイ話モアッタモンデスネ』
「・・・な、なにがですの？」
ノーマッドの詰問を、そしらぬ顔でとぼけようとするミント。
『偶然ふぉるてサンガ逃ゲ込ンダ星ガ、裏取引ノ現場デスッテ？デキスギタ話デス」
「・・・仕方がありませんわ。先日のマッコイといいブッチー・ノーメスの件といい、明らかにロステクの情報を横流ししているのは軍の内部、それもわたくし達より上の権限をもった者の仕業・・・表立って動くわけにはまいりませんもの」
怪訝な顔のミルフィーユと蘭花に、ミントが説明をする。
『シカシ、ドウヤッテふぉるてサンヲ誘導シタンデス？機体ノなびニ細工デモシテタンデスカ？』
「・・・まさか。わたくしはただ、毎晩寝てるフォルテさんの耳元で、『惑星Dチアゲル、惑星Dチアゲル』とささやいていただけですわ。あとはフォルテさんが無意識に・・・」
あきれた顔をする蘭花とノーマッド。
「・・・ヒマね、あんたも・・・」
「そんな・・・じゃ、フォルテさん一人であぶないじゃないですか！！」
「ミ、ミルフィーユさん・・・心配いりませんわよ、フォルテさんだってあぶなくなれば救援要請くらい」
「わたしも行ってきます！」
「あ！　待ちなさいよミルフィーユ！」
飛び出していくミルフィーユ。

「ここから先は、紋章機じゃ目立ちすぎるか・・・」
目星の廃工場から少しばかり離れた空地に「ハッピートリガー」を降ろし、歩を進めるフォルテ。
突如、殺気を感じて身構える。
「・・・誰だい？」
その問いに応えるかのように、三人の男が姿を現す。
ひとりは、頬のこけた垂目の男。
もう一人は、太った小男。
もう一人は長髪の軽そうな男だった。
「・・・少なくとも、味方じゃあなさそうだね。」
3人の男は、返答代わりにくぐもった笑声を響かせる。
どうやらリーダー格らしい、頬のこけた垂目の男が前に進み出て言った。
「引き返せ。ここから先へ進むものは、俺達”四天王”。が始末する。」
「・・・ふん・・・つまり、ここから先には見られちゃ困るモンがある、ってこったな。」
口元にかすかな笑いをうかべるフォルテ。
「・・・って、お前達3人しかいないじゃないか？」
ひぃ、ふぅ、みぃ、とわざわざ指で数えながらフォルテが言う。
「フッ、貴様ごとき我等3人で充分よ。」
太った小男が、鎖のついた棘鉄球を振り上げる！！
「滅！殺――！！」
「！！」
咄嗟に避けるフォルテ。そばの樹木がへし折れた。
そしてさらに、避けた先に長髪男の両肩に背負ったビームキャノン砲が狙いをつけていた。
「くたばれ！！」

「ちぃっ！！」
体をひねり、砲撃をかわすフォルテ。
さらに間髪いれず、垂目の男が手にした大鎌で斬りかかってくる。
「斬殺美――！！」
それをしゃがんでやりすごすフォルテ。
（こいつら・・・それなりに訓練をうけてやがる？　3対1じゃ分が悪いか・・・！）
両側からじりじりと詰め寄る、鉄球の男と大鎌の男。
少し離れた位置からは、長髪男のキャノン砲がぴったり狙いをつけていた。
そのとき。

どこからともなく飛んできた二つの投石。
それは、正確無比に長髪男の両の砲門を塞いだ。
「・・・は？」
長髪男が、何が起きたのか理解する前に。
今、撃たれようしていたビームキャノンが暴発した！
「あんぎゃああ――！？」
間抜けな悲鳴をあげ、黒焦げになって気絶する長髪男。
「なにっ！？」
のこる2人が気を取られた隙に、フォルテの膝蹴りが鉄球男の鳩尾に、さらにひじ打ちが大鎌男の顔面をとらえた。
「げほぉ」
「ぐへぇ」
地に倒れる二人。
フォルテはゆっくりと辺りを見回す。
あたりには、他に誰の気配も無い。
「・・・・・・。」
何かを気にとめながら、先を目指すフォルテ。

フォルテはどうにか、件の廃工場前にたどり着いた。
辺りはすっかり陽が落ち、薄闇をバックに工場棟が不気味に見える。
「ここだな？　ミントが言ってやがったのは・・・」
「やって来たわね、ロストテクノロジーを狙う悪人！！」
「あン？」
ふいに目の前に現れた人物が、フォルテを指差し叫ぶ。
それは、弓を構えて凛々しく立った、長い黒髪の少女。
「残念だけれどあなたの野望もここまでよ。この、四天王最後にして最強をほこる、『闘病戦士ちとせ』の前には・・・あ、あれ、フォルテさん？」
「・・・ちとせ？　お前何やってんだこんなとこで？」
ツインスター隊の新入りメンバー、烏丸ちとせがそこにいた。
一瞬面食らった後、何かを悟ったような表情で向き直るちとせ。
「・・・そう。ついに悪の手先に成り下がったというわけねフォルテ・シュトーレン！！　ならば、このあたしの手で引導を渡してあげるわ！！」
「・・・あぁ？　ちょっと待て、お前なにかカン違」
「問答無用！！　ちとせアロー――ッッ！！」
うろたえるフォルテにかまわず、矢を射るちとせ。
「うわ危ねえ！！」
きわどいところで回避するフォルテ。
間髪入れず、ちとせは次から次へと矢を放つ。
「えいっ！えいっ！」
「こらやめろつってんだろ！！　おわぁ！？」
それらのことごとくを、ギリギリで避けまくるフォルテ。
「やるわね・・・ならこれでどう！？　」
ちとせは、１０数本もの矢をまとめて弓に番える。

「うわバカよせ！！」
「ちとせゴォ～ガン・束ね射ち――！！」
「おわぁぁぁあああああ――――――！！？？」
必死のえびぞり状態になりながら、フォルテは放たれたすべての矢をどうにか避けきった。
「・・・フォルテさん！　どうしてやられてくれないんですか？！」
「どうして、じゃねえだろ！　転がすぞてめぇ――！！」
フォルテは自称・闘病戦士につかつかと近づき、その脳天におもいきり踵落としをくらわせた。
「い、痛い――・・・」
「うるせぇ。お前なに敵に回ってんだよ！？」
「敵ー？　何言ってるんですか、私はクランベル大佐に言われてここにいるんですよ？　ここにあるロストテクノロジーを守るように、って・・・」
「・・・クランベルだと！？」
フォルテがちとせの胸倉につかみかかる。
「どういうことだ！！」
「ぐ、ぐるじい・・・」
締め上げられ、窒息死寸前になるちとせ。

ちとせに案内されながら、フォルテは敷地内を調べて回る。
「だって大佐が、あなたにしかできない仕事よ、っていうものだから、ああ私は必要とされてるんだ、　って思って・・・」
ちとせの話を聞き流しながら、なにやら考え込むフォルテ。
「・・・まさかあいつ・・・自分の立場を利用して・・・？」
その時。
がさごそ・・・と、何かがうごめくような不気味な音が2人の耳に入った。

「ん・・・なんだ？」
そして、宵闇のなかから「それら」があらわれる。
「な・・・ッ！？」
「ええっ？！」
そこに現れたのは・・・異形の姿。
上腕をだらりとたらし、大顎をまるでにやりと笑うように動かしながら、まさに「魔物」と呼ぶにふさわしい土気色の怪物たちが、いつのまにやら群れをなして2人を取り囲んでいた。
「・・・！　おいちとせ！！　一体なんなんだこいつらは！？」
「し、知りません、わたし知りませんこんなの・・・！」
フォルテの問いに、ちとせが青ざめた顔で首を振る。
（こいつらもロステクか・・・？）
獲物を前にした獣の群れのごとく、正体不明の化け物たちがじわじわと迫る。
「来るぞッ！！」
間髪いれずコートの下に隠し持っていた2挺のマシンガンを取り出すフォルテ。
「おらおらおらぁっ！！！！！」
ふたつの銃口が激しく火を噴き、異形のものたちが砕け散る。
さらに右から左から、次々に迫る怪物たち。
「きゃ――っ！　いや、来ないで――！！」
叫びながら矢を乱射するちとせ。それでもどうにか、化け物どもを射抜き倒していく。

すべての「魔獣」たちを倒したフォルテ達。
「ふう・・・どうにか片付いた、か・・？」
「こ、こわかった・・・」
ふと、フォルテがしゃがみこみ、怪物たちの残骸のひとつをを拾い上げる。
「土・・・？」

目を見張るフォルテ。
倒された「魔物」たち。それらのすべてが、土くれでできていた。
「手ごたえが変だとは思ってたが・・・？どういうこった・・・？」
「フォ、フォルテさん、あれ・・・」
「あん？」
おびえた声のちとせに、顔をあげるフォルテ。そこには。
「なっ！？」
さらに闇のむこうからあらわれた、新たな「魔物」たちの群れ。
その数、およそ数十倍。
「・・・じょ、冗談じゃねえぞ？」
おもむろにちとせの腕をつかんで走り出すフォルテ。
「ここは逃げるしかねえ！！」

出口は、すでに塞がれていた。
棟のひとつに逃げ込み、身を隠すフォルテとちとせ。
「・・・ふう、どうにかやりすごした・・・か？」
「うう～、わたし『急に走ると横腹が痛くなっちゃう病』なのに・・・」
遠隔操作で紋章機を呼ぼうとするフォルテ。
「ハッピートリガーが応答しない・・・？！」
「シャープシューターも応答しませんわ！」
「くそー、この工場一体に妨害がかけられてるんだ！！」
「ど、どうするんですフォルテさん？」
「――フォルテさん、こっちです」
「・・・？」
「・・・えっ？」
「第3者」の声に振り向くふたり。
物陰から、声の主がそっと姿を見せる。

「・・・ルベリィ？！」
この場にはあまり似つかわしくない、ウエイトレス姿のままのルベリィが立っていた。
「この向こうの搬入用地下通路から外に出られます。フォルテさん達はそこから逃げてください」
一瞬驚いた後、フォルテが口を開く。
「・・・それで、お前はどうする気なんだ？」
「・・・それは・・・」
口ごもるルベリィ。
「・・・クランベルと、話をつけようってか？」
「――！！」
「お前がそんな態度をとるのは、あいつしかいねえからな・・・」
「・・・聞こえてたんです。義姉さんがフォルテさんを殺すように命令しているのが・・・だからずっと後をつけて」
「お前なら紋章機でも追跡できるか・・・さっき助けてくれたのも、お前だったんだな。」
「はい。」
「あ、あのーフォルテさん？　お話中のところ申し訳ないんですけど」
「ちょっと静かにしてろ、四天王。」
「それはもういいですからー！っていうか、壁がもうもちません！！」
「なにっ！？」
ちとせに言われて振り向くフォルテ。
見ると、押し寄せる怪物たちの群れに、外壁がいままさに破られようとしていた。
「ここはわたしに任せて、早く！！」
前に進み出たルベリィは、いままさに破られんとする壁に向かって身構えた。
次の瞬間、裂かれた壁から津波のごとく、黒い怪物たちが押し寄

せる。
「はあっ！！」
それと同時に、ルベリィのかざした右掌から衝撃の波が走り、数十の怪物たちをまとめて吹き飛ばした。
口をあんぐりと開け、呆然となるちとせ。
「たあっ！！」
さらにルベリィは、「魔物」の群れの中へと神速の速さで突っ込み、一気に駆け抜けた。
疾った後の魔物たちが、すべて両断され崩れ落ちる。
しかしそれでもなお、次から次へとわいて出る異形のものたち。
その光景に唖然としたままのちとせを、いきなり引っ張って走り出すフォルテ。
「ここはあいつに任せて、アタシ達は中枢を叩くよ！　どこかにこいつらを操ってるヤツがいるはずだ！！」
「って――！！　ちっともわけわりません説明してくださいフォルテさん――！！あの人何者なんですか――？！」

「えっ・・・！？　じゃあさっきのあの子・・・ロボットなんですか？」
「ああ。たった一体で戦況をひっくり返せるほどの力を持った、戦闘用アンドロイドだよ」
驚くちとせに、うなずくフォルテ。
「あいつは性根がやさしすぎんだよ・・・だから、敵将にとどめをさせずに逃がしちまったことがあってな・・・それで兵器として”欠陥品”のレッテルはられて、あわや廃棄処分ににされるところだったんだが・・・そこを、クランベルの親父に引き取られた」
重い口調で語りつづけるフォルテ。
「兵器商人だったあいつの親父は、自分の売りさばいた兵器で自

分の娘・・・クランベルの実の妹だ・・・を失って以来、商売から完全に手を引き、財産をなげうって戦災孤児への寄付につぎこんだ・・・そんな時だったな、ちょうどルベリィを引き取ったのも。・・・ただ、親父は良くても姉貴の方はそうはいかなかったらしい・・・感情のやり場がなかったのかもな。・・・まさか、裏の仕事に手を染めるほどやさぐれてたとは知らなかったが・・・」

フォルテの話を聞きながら走っていたちとせが、ふいに足を止める。

「あれ・・・何なんでしょう？」

ちとせの指し示す方向。

土が剥き出しの中庭に、一瞬オブジェと見間違えそうな、しかし見るからに不自然な光を放つ円錐が、逆さに突き刺さっていた。

「あれは・・・あのわけわかんなさは、ロストテクノロジーか？」

すると。

「円錐」の周りの土が盛り上がり、次々に「魔物」の姿を成す。

「あっ！！」

「・・・土からいくらでもバケモンを作り出すロストテクノロジーか！　・・・なるほど、番兵にゃうってつけだ・・・！」

「早く止めましょうフォルテさん！！」

「ああ！！」

フォルテが再びコートの裏から、今度はライフル銃を取り出す。

いったいいくつ持っているのか、不思議に思うちとせ。

新たな魔獣たちを撃ち倒し、さらに「円錐」を狙撃するフォルテ。

数発の銃弾をうけた円錐は、ばちばちという閃光とともに、光を弱めていく。

「やりましたね！」

「ああ、これでひとまずは・・・」

「・・・やってくれたわね」

ふいに、背後から声がした。

「クランベル・・・・！？」
ルベリィの義姉、クランベルが通りの向こうから姿を現す。
その表情には、思いつめた様子がありありとうかがえた。
「・・・知られたからには、死んでもらうわよ」
その手に握られた、「ボウガン」を2人に向ける。
「たっ、大佐？」
ちとせが前に出て問い詰める。
「大佐！！　私をだましたんですか！？」
「あなたなら、いてもいなくても誰も気にしないと思ったのよ」
あまりの言葉に、ちとせは滝のごとく涙を流す。
そんなちとせに哀れむようなまなざしを送った後、今度はフォルテが進み出た。
「・・・そこまで落ちぶれたか？　クランベル。あんなにプライドの高かったお前が」
「黙りなさい！　わたしにはもう後戻りはできないのよ！！」
「アタシには、ただやけくそになってるだけに見えんだけどね。」
「黙れ――！！」
握りしめた、ボウガンの矢を放つクランベル。
すかさず、避けようとするフォルテ。
しかし。

放たれようとしたその矢が。
フォルテの肩に・・・
”すでに刺さって”いた。
「ぐッ！？・・・なん・・・だと？」
「フォ、フォルテさん！？・・・はうっ・・・」
駆け寄ったちとせが、フォルテの流血を見て勝手に意識を失う。
（こいつには、このまま寝ててもらった方がありがたいか・・・）

痛みをこらえて矢を抜くフォルテ。
「そいつも・・・ロストテクノロジーだな？」
「そう。このボウガンから放たれた矢は、ほんの少しだけど時空を飛び越えるの。
いくらあなたでも、どこから来るかわからないこの攻撃は防ぎきれないでしょう？」
再び、「矢」が放たれた。
すかさず、柱の後ろに身を隠すフォルテ。だが。
「！！」
届かないはずの矢が、帽子を貫いて吹っ飛ばす。
「――！」
「あら、惜しい。」
（くっ・・・こっちが不利か・・・？！）
フォルテの額に冷汗がつたう。その時。
「フォルテさん！」

すべての敵を片付け終えた、ルベリィが駆けつけた。
「義姉さん！　もうやめてください！！」
「おだまり！　ガラクタ人形！！」
再びボウガンを撃つクランベル。
その「矢」を叩き落そうと動くルベリィ。しかし。
「！」
空間から消えた矢は、ルベリィをすり抜けて背後のフォルテを直撃した。
「フォ、フォルテさん？！」
ライフルを盾代わりに、すんでのところで防ぎきったフォルテ。
（くそ・・・最後の1挺が・・・！）
銃を置き、ゆっくりと立ち上がるフォルテ。
「・・・ルベリィ、ちとせを外へ連れ出してくれ。」
「・・・！　フォルテさん？」

「お前の姉貴は・・・アタシが何とかする・・・お人好しのお前じゃゃ、『姉貴』と戦うなんざ無理だろう・・・」
「でも！　フォルテさん！！」
「いいから早く行け！！」
気を失ったちとせを担ぎ上げるルベリィ。
「姉さんを・・・頼みます」
「・・・ああ」

武器も持たず、クランベルの前にその身をさらすフォルテ。
「――？　抵抗はあきらめたの？」
「避けても隠れても無駄、か。――だったら――」
軽く足をふり、ヒールを脱ぎ捨てるフォルテ。
「”ブチ当たる”っきゃねえだろう！！！！」
いきなり身構えたかと思うと、次の瞬間。
「うぉぉおおおおおおお――――――――！！！！！！！！」
クランベルの「真正面」に向かって、全速力で突進するフォルテ！！

「な・・・？　く、狂ったかっ！！」
一瞬の躊躇の後、フォルテの眉間に矢を放つクランベル！！
放たれた「矢」は一直線に空間を飛び越え――
――そしてそのまま、フォルテの通り過ぎた「真後ろ」に虚しく転がった。
「なっ！？」
目を見開くクランベル。
その間にも、突進してくるフォルテはどんどん距離をつめてくる。
クランベルが続けざまに放つ矢は、すべてフォルテの「通り過ぎた後」へと抜けていく。
たちまち、目前にまで迫ったフォルテ。

「！！！！」
次の瞬間、強烈なアッパーカットがクランベルの顎を直撃した。
「ぐ・・・はあっ・・・・・・・！！」
もんどりうって倒れるクランベル。
「・・・お前には・・・心配してくれる奴がいるだろうが・・・」
肩で息をしながら、フォルテはつぶやいた。

ずずん・・・
建物全体が、揺れた。
「地震か・・・？」
そして、激しい響きとともに、突如崩れ始めた建物。
「なッ・・・なんだあ？！」
みるみるうちにばきばきと大地が割れて。
ゆうに５０メートル以上はあろうか・・・
敷地中の「土」をかき集めた、信じられない大きさの「魔物」が姿を現した。
「なんじゃこりゃああ！？」
巨大な足が、仰天しているフォルテを踏みつぶさんと迫る。
すかさず横に飛んでかわすフォルテ。
その視界に、燃え尽きる前のロウソクのような、強烈な光を放つ「円錐」が見えた。
「しまった・・・さっきのショックで・・・ロステクが暴走しちまった！！」
巨大魔獣の足踏みによって、大地に亀裂が走った。
「うわっ！」
とっさに投げた鞭を命綱に、かろうじて地割れに呑まれるのを防いだフォルテ。しかし。
「クランベル？　しまった！！」

気を失ったクランベルの体は、そのまま地の底にへと呑みこまれていく。
その瞬間。
疾風のごとく飛び込んだ影が、落下していく彼女の体をかっさらう。
「――！？」
驚く間もなく、フォルテの体も瞬速の影によって宙へと掬い出された。

少し離れた丘の上。
眼下の廃工場では、膨れあがるだけ膨れあがった巨大怪物が、自重に耐え切れず崩れ落ち。
ただの土塊と化した小山は、２度と動くことはなかった。
「終わった、みたいですよ。」
両腕にフォルテとクランベルを抱えたルベリィが言う。
そばの大木の根元には、まだ気を失ったままのちとせが寝かされていた。
「・・・すまねえな。またお前に助けられちまった。」
地に降りて、服の土埃をはらうフォルテ。
クランベルもすぐに意識をとりもどした。
「・・・あ、あなた・・・」
自分を向いてなにかを言おうとする義姉を、そっと地におろすルベリィ。
「・・・わたしに”家族”と呼べるのは、あなたしかいないんですから・・・」
後ろを向いたまま、ルベリィは静かに言った。

「それで・・・クランベルさんて人はどうなったんですか？」
心配して、わざわざ迎えにやってきたミルフィーユが、フォルテとちとせに事の顛末を聞いていた。
「ああ、ルベリィのとこで静養してる。」
「書類の上では、死亡扱いだそうですわ・・・」
「ま、やり直すにはちょうどいいかもな。」
「・・・ところで、ちとせさんはどうしてここにいるんですか？」
きょとんとした顔で訊ねるミルフィーユ。
「（ぎく！）え、ええと、わたしも実は極秘の任務で・・・ね、ねえフォルテさん？」
「さて・・・どうだったかな？」
そこへ。

「あ、皆さん！」
ルベリィが見送りにやってきた。
ミルフィーユがこんにちわとあいさつをする。
「これ、うちの店のランチですけど・・・よかったら」
フォルテにバスケットを渡すルベリィ。
「・・・で・・・あいつはどうしてるんだ？」
心配そうに訊ねるフォルテ。
「まだ・・・ちょっとぎくしゃくしてます。けど・・・」
顔を上げるルベリィ。
「姉さんが・・・初めて私の作ったスープを飲んでくれました・・・」
微笑みを見て、ほっとするフォルテ。
「そっ・・・か。よかったな。」
手を振るルベリィを後に、３人の紋章機が飛び立つ。
操縦席の中で、ふとあることを思い出すフォルテ。

（そういえば・・・ヴァニラのやつ、代筆って何書いたんだ・・・？）

エンジェル基地。
ヴァニラの代筆した「レポート」を読みながら、わなわなと震える上官。
その禿頭にはありありと血管が浮かびあがり、分厚い眼鏡の奥からでも激しい怒りがはっきりと見てとれた。
「ウォ、ウォルコット君・・・」
「・・・は、はい・・・」
「何かね・・・これは？」
「え、えっと・・・レポート、ですが、その・・・部下の。」
ひきつった笑顔でどうにかごまかそうとする中佐。
「この・・・わけのわからん文章が、かね・・・？」

”――神は来たるべき約束の日に、すべてのものに審判をくだします。おろかなる者たちはすべて報いを受け、ぬかみその海へと沈むでしょう。そして無垢なる生命とその輪廻のすべては大いなるものとひとつになって、永劫回帰惑星より出でし福神漬けの魂の前に、其はやがて夕飯のお惣菜でさえも無限の果てに銀河の終焉へと運命をともにします。それは新たな新巻きジャケの創世へと導かれる・・・”

「きっ・・・君は私をバカにしておるのか――――っ！！！！」
・・・ウォルコット中佐は、もはやすべてをあきらめた表情で、ただ立ちつくすのみだった。

―第５話・ＥＮＤ―

（後書き）

≪２００５年２月≫

アニメ４期の後なのでいきなりちとせが登場しています。途中に出てくる３人組はガスト、パトリック、ジョナサン。今回、アニメでの「時々シリアス風味」を意識してみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3605n/

勝手にGA５『有名店の型くずれクッキー』

2010年12月13日06時07分発行